

### Aさん（第1期生・男性）

3年のプログラムを経て、この春から新たな職場で公認心理師として働き始めました。他の職種の意図を汲みながら即時の対応を求められたことや、発達や知的の面でシビアな子達と長く関わったこと、複数の事実を元に解釈して支援の仮説を立てるなどといったアセスメントする上で不可欠な視点など、楡の会での経験が今の仕事の中で面白いほど活かしています。検査結果の報告では、得た事実を元に仮説を書いた後、その仮説に応じて『好い事作り療法』や楡の会の職員の関わり方から学んだ支援方法の提案を書いてみたところ、一部の相談員の先生から太鼓判を押して頂いています。色々としんどい思いもあった3年間で、同じ経験はしたくないと思ってしまいますが、心理士の基盤として、とても良い経験を積めました。入社当初は、子ども達に対して「できない、やらない、指示を聞けない」などと感じやすかったことを思い出しますが、どうしても難しいことがたくさんできてしまう子ども達と継続して関わった環境が、自分の中で財産になっているのだなと感じています。

### Bさん（第1期生・女性）

当プログラムは、“実践”と“理論”の両面から経験を積めるという点が強みなのではないのでしょうか。“実践”では、ライフステージごとの事業所で支援者としての動きが求められます。主に子どもたちとの関わりが中心で、発語や意思疎通が難しい方がほとんどの中、各利用者様の思いやニーズ、関わり方について実際に体験する中で学びました。“理論”では、いわゆるグレーゾーンと呼ばれる水準や不登校などの、実践で関わった以外の状態像を持つ方々について過去データを用いたカンファレンスもあり、心理師として現場で求められる考え方を身に付けることができました。他にも、Dr.の診察陪席や心理検査の実施など、福祉と医療の連携について間近で見学できる点も、当プログラムの強みであると感じます。

私たちは1期生ということもあり、当法人の中でプログラムの在り方や進め方を模索しながら進んでいった3年間だったのですが、私は子どもが好きなのが大きな要因として充実した3年間となり、心理師としての土台を築くことはできたと感じています。

### Cさん（第1期生・女性）

3年を振り返ってみると、様々な年齢・状態像の子どもと実際に関わりながら試行錯誤できたことが、私にとってとても意義のあることだったと思います。子供たちの日々の成長や変化に刺激を受けることができるのはもちろん、「普段の様子から比べてどうか？」「これまでの様子と何が違うのか」「他の子とはどんなところが違うのか」などと比較することで、見かけの行動や言葉だけでは見えなかった部分に気づくことや、子どもに寄りそう手がかりを見つけることができ、子どもを、そして人を理解するということの土台を作る期間にできました。先輩心理師からフィードバックをして頂くことや、看護師・保育士などの様々な職種と日々一緒に現場で過ごすことができたため、色々な関わり方や視点を体感できたのも大きな学びでした。また、疑問に思ったことや自分の中で上手くできなかったことを共有・相談しながら、「何が起こっていたのか」「その子にとってはどんな意味があったのか」「次はどんなことができそうか」などを丁寧に振り返る時間を作っていただけでも、今後アセスメントや対人支援をしていく上で糧になるものでした。周りの多くの職員さんに支えてもらいながら沢山のことを学ぶことができた3年間だったと思います。